二〇二二年度

# 入学試験問題

# 国語

注意

・問題は十五ページにわたって印刷してあります。
・試験時間は五〇分です。
・声を出して読んではいけません。
・答えは、問題の指示に従って、解答欄の決められた場所に濃く、はっきりと書きなさい。
・答えをなおすときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
・字数指定のある問いはすべて、句読点・記号も一字と数えるものとします。
・答えはすべて別紙解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。

学校法人 東洋大学
東洋大学京北高等学校

**1** 次の問いに答えなさい。

問一 (1)〜(5)の傍線部と同じ漢字を含むものを、次の各群の**ア**〜**エ**からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(1) **イギ**を正して整列する。
**ア** **サギ**被害にあう。
**イ** 辞表を出したが**イリュウ**された。
**ウ** 朝廷の**ギシキ**について調べる。
**エ** 経験に**イキョ**して小説を書く。

(2) 社長を**ホサ**する。
**ア** 鹿を**ホカク**する。
**イ** 芥川賞**コウホ**の作品。
**ウ** 行政の**カンサ**が入る。
**エ** 地獄の**サタ**も金次第。

(3) 科学は**フヘン**的な法則の確立を目指す。
**ア** 離れを**フシン**する。
**イ** 両親を**フヨウ**する。
**ウ** 組織を**カイヘン**する。
**エ** 学力を**ヘンチョウ**する教育。

(4) 汚職議員の**ハイセキ**運動を起こす。
**ア** 規則を**テッパイ**する。
**イ** **シュクハイ**をあげる。
**ウ** 車の**ハイキ**ガスは有害だ。
**エ** お知恵を**ハイシャク**する。

(5) 景色を写真に**オサ**める。
**ア** 言論の自由を**ヨクアツ**する。
**イ** 全課程を**リシュウ**する。
**ウ** **チスイ**工事を進める。
**エ** 用地を**バイシュウ**する。

問二　傍線部①～⑤の品詞を、**ア**～**コ**からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸(さいわい)になるなら、どんなことでもする。けれども、①いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、②一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」③ジョバンニはびっくりして叫びました。

「ぼくわからない。④けれども、誰(たれ)だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、⑤なにかほんとうに決心しているように見えました。

（宮沢賢治『銀河鉄道の夜』）

**ア**　名詞　　**イ**　動詞　　**ウ**　形容詞　　**エ**　形容動詞　　**オ**　連体詞
**カ**　副詞　　**キ**　接続詞　　**ク**　感動詞　　**ケ**　助詞　　**コ**　助動詞

問三　(1)～(3)の傍線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いになおしなさい。

(1)　わがあしきゆゑをいひて、よき考へをひろめよ。

(2)　木の葉に埋もるるかけひのしづくならでは、……

(3)　鳥は、異所のものなれど、あうむいとあはれなり。

問四　(1)、(2)の傍線部の古語の意味としてもっとも適切なものを、**ア**～**エ**からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(1)　十一になり給へど、程より大きに、おとなしう清らにて……

**ア**　背が高くて　　**イ**　大人びて　　**ウ**　美しく　　**エ**　評判高く

(2)　薬も食はず、やがて起きもあがらで病みふせり。

**ア**　そのまま　　**イ**　だんだん　　**ウ**　いつも　　**エ**　少しも

問五　(1)、(2)の人物と関わりの深い作品を、ア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(1)　紀貫之

ア　『蜻蛉日記』　イ　『更級日記』

ウ　『土佐日記』　エ　『十六夜日記』

(2)　川端康成

ア　『沈黙』　イ　『伊豆の踊子』

ウ　『舞姫』　エ　『それから』

問六　(1)、(2)の熟語と構成が同じものを、ア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(1)　未来　(2)　作文

ア　永久　イ　親友　ウ　無視　エ　握手　オ　功罪

問七　次の現代語訳を参考にして返り点をつけたとき、もっとも適切な漢文を、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

【現代語訳】食べてみなければ、そのおいしさはわからないのだ。

ア　不食、不知其旨也。

イ　不食、不知其旨也。

ウ　不食、不知其旨也。

エ　不食、不知其旨也。

**2**

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

玄関で靴をはきながら「出かけます」と誰にともなく声をかけると、待っていたかのようにおばさんが奥から出てきた。心配そうな表情を隠さず、薫(かおる)の顔をうかがっている。「何時ごろ、おもどりかね」と言う。「岬に行って、どこかでお昼を食べて、元気があったら町のなかを歩いて……どんなに遅くとも夕方にはもどります」薫は考えていたとおりのことを口にした。「そうだ、あの、岬に行く途中とかに、食堂とかレストランとかありますか」

「あるにはありますよ。一軒だけ、食堂が」

「そうですか。寄ってみようかな」

薫はつとめて明るく話したが、おばさんはまだ、高校生がひとりで泊まりにきて、海にせりだす灯台にでかけてゆくなんて大丈夫だろうか、自殺したりしないだろうか、という顔で薫を見ている。薫は申し訳ない気がして、笑顔で「行ってきます」と言ってみたが、ぎこちない笑顔はかえって逆効果になったようだ。

「気ぃつけて」とおばさんは言った。

「あ、ちぃと待ってな」玄関を出たところでおばさんに呼びとめられた。

おばさんは玄関の壁にかけてあった麦わら帽子をとって、ぶっきらぼうに言い添えた。

「これかぶらんと、頭焼ける」

薫は「ありがとうございます」と言って素直に頭を下げ、麦わら帽子を受け取った。「行ってきます」

古びた顎紐(ひも)が、耳や頬のあたりで揺れた。

海風が吹くなかを国道沿いに西に向かってしばらく歩くと、さほど大きくはない森を濃い緑のこぶのように背負った岬が太平洋に向かって延びているのが見える。こんもりとした森は亜熱帯植物の原生林らしい。

岬が近くなると、セミがみっしりと切れ目なく鳴いている。国道を左折して、岬の突端に向かう遊歩道を歩いた。とたんに海風が弱くなる。湿度が高く、出てくる汗が乾かない。頭がちくちくするので、麦わら帽子を脱いで手に持った。

ここを最後に行き来したのは誰なのだろう、と疑(うたぐ)りたくなるほど遊歩道には人の気配がなかった。細い枝や乾いた葉がたくさん落ちている。森のなかには名前のわからないシダのような植物が青々とした匂いを立てて繁(しげ)っている。近くの木の繁みから、薫に驚いた鳥が羽ばたいて飛びだしてゆく。薄暗い道を抜けると、広々と明るい場所に出た。日差しを浴びる遊歩道は下り坂になり、岩がちな浅瀬の両側に小さな湾を見渡しながら、ふたたび坂道をのぼり前方の森のなかへ入ってゆく。岬の先端はひとつの島になっていた。

森に入る手前に案内図があった。ここから先に神社があるらしい。遊歩道が続いているから立ち入り禁止というわけではない。ふたたび森に入るところに鳥居があり、その下をくぐ

る。気のせいか、森の木々の色合いが深く濃くなってきたように感じられる。セミの鳴き声もまばらになった。あいかわらず誰ともすれ違うことがない。途中で神社への参道があったが、そちらには入らずにまっすぐ進んでゆく。するとまもなく、木々のあいだから白い灯台が見えてきた。

灯台はさほど大きくなかった。白いペンキが塗られているのではなく、白い小さなタイルがぐるりと貼られている。プレートがあり、薫の生年より少し後に建てられたとわかる。それから同じ場所でずっと、海に向かって光の筋をのばしているのだ。

灯台の向こう側にまわり込む小径（こみち）があった。雑草がはびこっているので誰も足を踏み入れていないのだろう。薫はそこからさらに海側への細い道を先へと進んでいった。

灯台の前の岩場は、海から十数メートルほど高い場所にあった。たしかにここから飛び降りたら、助からないかもしれない。海の色は青黒く、深そうだった。泳げない薫が落ちたら間違いなく命がないだろう。

薫は麦わら帽子をかぶり紐をしっかりと顎の下で結んでから、両手をつかって岩につかまり、足元に気をつけながら灯台の前の方へとまわりこんでゆく。目の前にまぶしいほど日の当たる平らな場所が現れた。見渡すかぎりが太平洋だった。岩場の下から波のあたる音が聞こえてくる。潮の匂い。股間のあたりがざわざわする。薫は乾いた岩をえらんで腰を下ろした。

目の前には海だけが広がっている。つよい流れの黒潮の海だった。

沖合を大きな船舶が通りすぎてゆく。

海はおだやかで波頭も見えない。タンカーのような船もあれば、貨物船のような船もある。波を切って進むのではなく、音もなく海面を移動しているように見える。ここから船までの距離も船の速度も見当がつかない。それぞれの船はどれくらい時間をかけて、どこへ向かおうとしているのか。どこからなにを積んで帰ってきたのか。

船を操る人も、そこで働く人も、遠すぎて見えない。

アメリカに行く船もあるのだろうか。今日、どこかの港に入ろうとしている船もあるのだろうか。船を見ているだけでは、行きか帰りかもわからない。

大叔父は高校生のころ、貿易の仕事をしたがっていた、と聞いたことがある。小樽（おたる）の学校に行ったのもそのためらしい。北海道の学校に行くなんて大叔父らしいとおもった。そのころから冗談ばかり言っていたのだろうか。

飽きるまで海を見ていようと思ったが、飽きることはなかった。薫はただ見ていた。目の前の光景をただ網膜が受けとめていた。

沖合の船を見ていると、時間が流れることにおおきな意味はないとおもえてくる。人間は流れる時間のなかで生きている。カレンダーをつくり時計をつくり、時間や歳月をはかっている。それは時間の影のようなもので、時間そのものではないと薫はおもう。見えるようで見えないもの、誰にも止められないものである時間が、このような光景としてあらわれている。それをことばにするなら美しいということではないか。

①船は、離れて見たときにはじめて光景となる。音もなく動いている船を、動かされているとおもう必要はない。動かさなければとおもう必要もない。どうしようとしても、それは動いているのだから。

眼下に打ち寄せる波は、おおきな時間の流れや動きとは別に、②ただそこで生まれる小さな事故のようなものかもしれなかった。誰も気づかない事故。自分がなにを失敗しても、この波と変わらない。誰も見ていなければ誰も気づかない。

薫はおおきく伸びをした。そのときめまいがした。そのままじっとしていると、海風を感じた。そしてまたあくびをした。何度もつづけて、あくびが出た。あくびに押し出された涙が潮風にさらされている。薫は鼻をすすった。

心配そうにしていた民宿のおばさんの顔が浮かんだ。

岬から国道までもどるあいだも、誰ともすれちがうことはなかった。

国道沿いに、民宿のおばさんが言っていた、すっかり洗い晒したような木造平屋の定食屋があった。腕時計を見ると一時を過ぎていた。

案の定、客は誰もいなかった。ビニールクロスのかかったテーブルが並んでいる。海側は窓になっている。そのひとつに座っていた老人が店主のようだった。天井近くの神棚のようなところに据え置かれたテレビで国会中継をじっと見ていた。国会中継を熱心に見ている人をはじめて見た。その老人の妻らしき人が注文をとりにきた。薫は冷やし中華を頼んだ。老人は席を立った。国会中継はそのまま流れていた。

あまり冷えていない冷やし中華を食べ終わり、薫は店を出た。老人はまた同じ席にもどって、熱心に国会中継を見はじめた。断片的に耳に入ってくる政治のことばが、海沿いの国道にへばりつくように建っている定食屋の老人とどのように関係するのか、薫にはまったくわからなかった。

「ただいま帰りました」

薫は自分の声が少しはずんでいるのを感じた。

「はーい、お帰りなさい」

おばさんは手拭いで両手を拭きながら部屋から飛びだしてきて、玄関に立った。見送りのときとはうって変わって満面の笑みだった。

「ようけ歩いて。おつかれさま」

なにがそんなにうれしいのかというくらい、機嫌がよかった。おばさんはほんとうに心配していたのだ。薫はそう感じて、申し訳ないようなありがたいような気持ちになった。「これありがとうございました」と言って、麦わら帽子をおばさんに渡した。「こんなんでもよかった?」と笑顔で訊かれて、「はい、助かりました」と答えると「ええんよ、なんも遠慮せんで」と言った。

風呂からあがると、薫の隣の部屋に家族がいた。小学一年生くらいの男の子と両親と祖母のようだった。

男の子は薫をみとめると、意外なものを見たような顔になり、そばにいる母親に向かって「ひとりや」と言った。「おおきな声ださんで」とおばあちゃんにたしなめられている。いちばん言われたくないことばを狙いすましたように言われたような気がした。

③そうなんだ、ぼくはひとりだ、と胸の内でつぶやいた。

タチウオの刺身、冷奴、トマトときゅうりのサラダ、味噌汁にごはんの夕食を済ますと薫は扇風機をつけ、ごろりと横になった。

まもなく耳もとに嫌な音がして、薫は飛びおきた。薫のいちばん苦手なもの。蚊だった。

また隣の部屋の前を急いで通って、おばさんのいそうなところへ声をかけた。「すみません。あの、蚊取り線香はありませんか」

「あるある。使うて」とおばさんは言いながら、蚊取り線香と灰受けの皿とマッチをまとめて渡してくれた。

隣の部屋の前を通ってもどるとき、男の子が遠慮なく凝視した。

薫は気づかないふりをして通りすぎ、自分の部屋の真ん中で蚊取り線香を焚いた。

男の子はいっときも落ち着かず、廊下を走ったり、その勢いでついこちらの部屋の前まで来てしまったというふりをして、薫の部屋を覗きこんだりした。自分なんかにどうしてそんなに関心があるのか。あれくらいの年の頃、こんなにあからさまな態度で他人への関心を示したことはなかったとおもう。あいかわらず叱ったり注意したりするのはおばあちゃんの役目で、両親はふたりでぼそぼそと話している。

薫はこういう男の子をあしらうすべを知らなかった。

通りすがりに、よその家で飼われている犬から執拗に吠えられているのと同じだった。蛍光灯の光の下で文庫本を読もうとしても、男の子の気配に気が散って頭に入ってこない。

あきらめて眠ることにした。

部屋の中央に敷いた布団の上に糊でパリパリになったシーツをかけ、ソバ殻の枕を置き、天井の蛍光灯を消した。

扇風機は「弱」の首振りにして、そのままつけておいた。

欄間[*1]から隣の部屋の灯りがさしてくる。

「もうねとる」と男の子の声が聞こえた。「こら」とおばあちゃんの声。

また蚊の羽音がしたので飛び起きる。扇風機の風が蚊取り線香の煙を吹き飛ばしているのかと思い、スイッチを切る。

どすん、と今度は襖を蹴る音がする。めずらしく父親が叱る低い声。

④薫には男の子の頭のなかにあるものがまるでわからない。わからないようでわかる気もする。ひとりで泊まっているのが不思議ならそれでかまわない。自分には説明する義理もなければ愛想をふりまく理由もない。相手になる必要はない。

だんだんと攻撃的な気持ちが芽生えてくる。

今度また襖を蹴ってきたら声をあげてやろうか。

寝つけずにいると、隣もやっと眠る準備を始めるのがわかった。そしてまもなく静かになった。庭のほうから虫の声がする。虫はもう秋の準備をしている。

薫は眠れなかった。

（松家仁之『泡』集英社）

＊1　欄間……和風建築において、障子やふすまと天井の間にある空間に壁を作らずに、格子や透かし彫りのある板をはめ込んだ開口部。採光や通風、装飾などの目的に用いる。

問一　本文に書かれている「薫」と「おばさん」の様子や心情についての説明として適切ではないものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　おばさんは、一人で岬へ向かおうとする薫のことを心配するあまり、薫が戸惑うほど親身になってあれこれと世話を焼いている。

**イ**　おばさんは、薫が無事に宿へ帰って来たことに対して、安心した気持ちを素直に表情や態度に出している。

**ウ**　薫は、自分の予定や考えが分かるように声かけや質問をして、おばさんを心配させないために気を遣って話している。

**エ**　薫は、自分を心配したり無事に帰ってきたことを喜んだりしてくれるおばさんのことを、好意的に受け止めている。

問二　傍線部①「船は、離れて見たときにはじめて光景となる」とあるが、ここでの「船」について説明したものとしてもっとも適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　遠くをゆっくりと進んでいる姿が、時を刻むカレンダーや時計を連想させる船。

**イ**　想像もつかないほど遠いところからやってきて、自分から遠い存在である大叔父のことを思い出させる船。

**ウ**　穏やかな海の上を音もなく動いている様子が、大きな時間の流れの中で生きていることを実感させる船。

**エ**　タンカーや貨物船のように大型で静かなところが、包容力のある民宿のおばさんの存在を感じさせる船。

問三　傍線部②「ただそこで生まれる小さな事故のようなもの」とはどのようなものであると考えられますか。その説明としてもっとも適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　世界の全体には影響を及ぼさない、部分的でかすかな変化。
**イ**　何らかの因果関係によって引き起こされるものではない偶然の出来事。
**ウ**　些細（ささい）であっても、巡りめぐって大きな変化を引き起こすゆらぎ。
**エ**　身近にいる者の影響によってのみ引き起こされるわずかな動き。

問四　傍線部③「そうなんだ、ぼくはひとりだ、と胸の内でつぶやいた」とありますが、このときの薫の様子としてもっとも適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　遠くの海の広さを見ることで自分の孤独を実感していたが、一番気にしていることを遠慮なく指摘してくる男の子の言葉によって寂しさをいっそう感じている。
**イ**　自分がひとりでいることを不審がるおばさんに対して嫌気がさしていたところに、更に同じことを遠慮なく言葉にする男の子の存在によってかえって開き直っている。
**ウ**　自分のことを気にかけてくれるおばさんの存在のおかげで気にしないでいられた事実を、あからさまに関心を示す男の子の言葉によって思い出し、はっとしている。
**エ**　沖合の船と自分を比べることで孤独感から抜け出せたと思っていたところに、自分のことを何度もきいてくる男の子の言葉によって悲しくなり、自分の立場を思い出している。

問五　傍線部④「薫には男の子の頭のなかにあるものがまるでわからない。わからないようでわかる気もする。」とありますが、この時の気持ちをくわしく説明した次の文の［　　］に入ることばを文中から指定の字数で抜き出して答えなさい。

［一〇字］ことを不思議に思う気持ちはわかる気がするが、［二字］である自分なんかにどうしてそこまで関心が持てるのかがわからない。

問六　本文の表現についての説明として正しいものを、**ア**～**オ**から**すべて**選び、記号で答えなさい。なお、すべて正しくない場合は解答欄に**×**を記入しなさい。

**ア**　薫が灯台に到着するまでの道中での、植物や動物など自然についての細かな描写や、時間が経過した人工物についての詳しい叙述は、身の危険を感じながら進む薫の恐怖心をよく反映している。

**イ**　沖合の船は、世界を股にかけて活躍する理想像として薫の目に映っており、目的のために広い世界へ旅立った、自分とは対照的な大叔父を思い出させる存在として描かれている。

**ウ**　近くの海の強い流れと遠くの海の穏やかさ、国道沿いの定食屋のおじさんと国会中継といった「近—遠」の対比により、場所によって時の流れの速さが違うことが表現されている。

**エ**　民宿で出会った男の子は、民宿のおばさんや同行している両親に叱られても落ち着かず、気になる人物の周囲を動き回る存在として描かれており、薫の過去をむき出しにするような役割を担っている。

**オ**　遠くの海を見ているときの心の動きや、男の子と遭遇したあとの部屋での音や気配についての詳しい描写からは、薫の持つ豊かな感性や繊細な感受性をうかがい知ることができる。

**3** 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

**A**

生態学の主要な概念の一つに、①遷移というものがある。実例で知ってもらうのが早い。

裸の岩石の土地があるとする。岩石に定着できる植物は地衣類[*1]だけである。地衣類が岩石につくと、岩石をほんの少しだけ浸食して、土壌をちょっぴり作り出す。すると、そこにコケ類がやってきて、地衣類を押しのけてしまう。コケ類はもっと岩石を浸食して、それだけ多くの土壌を作り出す。ある程度土の量がふえれば、その土が水分を保持してくれる。土と水分さえあれば、小さな種子植物が育つことができる。種子植物はさらに岩石を土壌に変え、そのおかげで、だんだんと小さな植物から大きな植物が育つことができるようになる。やがて、小さな木が育ち、大きな木が育ち、森林が形成されていく。一応、それ以上は変化しないという安定した状態になったとき、それは極相（クライマックス）に達したといわれる。

大体、裸の岩石から森林が生まれるまでに一、〇〇〇年、伐採地や、耕作が放棄された畑が森林になるまでには二〇〇年の年月がかかるといわれている。

クライマックスは永遠につづくというわけではない。なにしろ、自然の歴史に比べて人類史はあまりにも短いので、定かなことはいえない。しかし、非常に古い森林では、老衰とでも名付けられるような現象が起きていることが観察されている。

もっともたいていの地域では、これまでのところ、老衰するにいたる前に、台風、火災などの天変地異や、人間が手を入れることによって森林の成長は中断させられている。

遷移は植物の間だけで見られるものではない。植生が変化すれば、それにつれて、そこに生息する動物の相も必然的に変化していくものである。草原には草原の、森林には森林の動物がいる。

自然においては、万物が常に変わりつづける。生々流転が自然の実相である。

**B**

遷移はなぜ起きるのだろうか？

生物は、そのとき、そのところでの環境に最も適応したものが栄える。しかし、ある生物が繁栄すると、その生物の繁栄それ自体が別の環境を作り出す。その環境は、その生物よりも別の生物にとっての繁栄の条件を作り出す。こうして遷移は次の段階へと進み出す。

農耕という技術は遷移を人為的に妨害して、ある種の植物だけを常に繁栄させておこうとするものである。もし人間が畑の耕作や除草をやめれば、ただちに遷移は進行をはじめる。まず、いわゆる雑草が畑一面に繁茂する。翌年には同じ雑草でも、ヒメムカシヨモギ、ヒメジオンなどの、より丈の高い路傍雑草といわれる雑草が繁栄する。四～五年たつとススキ、チガヤなどのイネ科の植物がそれにとって変わり、やがて、ヌルデ、クズなどが繁茂してくる。そして、一〇ないし一五年たつと、コナラ、クヌギなどの雑木林になってしまうのである。

その時代に最も栄えているものは、常にその次の時代に栄えるもののための土壌を用意しているのである。きわめてマクロの視点にたてば、三〇億年に及ぶ生命の進化史は、地球を舞台にくり広げられた壮大な遷移のドラマであったということができよう。魚類の時代は両棲類の時代を準備し、両棲類の時代は爬虫類の時代を準備し、爬虫類の時代は、哺乳類の時代を準備した。そして現在は哺乳類の一部である人類の時代である。

この遷移の系列が、人類の時代をもって終わるということは、生物学的な常識から考えられない。三〇億年の地球史のなかで、それぞれの時代においてわがもの顔に地球を支配していた三葉虫や恐竜などがそうであったように、②われわれ人類も自己の活動それ自体によって環境を自らの存在にふさわしくないものに変えつつある。

もし人間が、自ら変えてしまった環境に生物学的に適応できなくなれば地球の支配権を次の生物に譲らなければならないのはあきらかである。

**C**

この遷移現象を人類の社会史の中に見い出したのがマルクス[*2]である。マルクスはそれを歴史の弁証法と名づけた。封建社会は絶対主義社会の土壌となり、絶対主義は市民社会を形成した。市民社会は社会主義社会を経て共産主義社会へという遷移系列をたどり、そこでクライマックスに達するであろうというのがマルクスの予言であった。この遷移を人為的に押し進める機関である革命党の理論をひっさげてレーニンが登場し、ロシアで遷移を一つ進めてみせた。

しかし、社会主義から共産主義への移行という次の段階の遷移は、うまくいきそうにない。なぜなら、あらゆる遷移の実例が示すように、遷移の進行とは、優占種の交代と同意義であるからだ。社会主義社会における優占種が権力の座についたまま、遷移が進行することはありえない。

遷移には革命がつきものである。優占種はその時代の環境に最も適合しているからこそ、優占種でありうるのであって、環境が変化すれば、凋落せざるをえない。たとえ、社会主義の次の段階が共産主義であるという予測が正しいとしても、その移行をになう主役は、社会主義社会の中でいま醸成されつつあるまだ知られていない種であって、現在の体制をになっている優占種ではないだろう。③その新しい種がマルクスの予言を実現してくれるかどうかは、むしろ疑わしい。

先例がない遷移については、遷移の次の段階までは予測できても、次の次の段階までは予測不可能だからである。マルクスは、空想から科学へを標榜しながら、次の段階の科学的な予測に、次の次の段階への願望を混ぜ合わせるという過誤を犯している。そして、彼のいう科学には、この空想の部分が豊かにあったがために、いつまでも魅力というよりは魔力を持ちつづけてこられたのである。

たとえば、進化史という遷移系列の未来を考えてみよう。現在の環境変化の進行から、優占種の交代が行なわれるとき、次なる優占種はいかなるものであるかについては、ほぼ科学

的な予測ができる。次代の優占種は必ず先代の優占種の内部あるいはその近縁のものから生まれてくる。だから、現代の最優占種たる人類と昆虫類から生まれてくる超人類、超昆虫類がそれになるにちがいない。では、その次はどうか？　これはもう予測不可能である。彼らが営む生活、それによる環境変化がいかなるものになるか、われわれには何の資料もないからである。

それをマルクスの偉大さというならば、マルクスの偉大さは社会史においてこの予測不可能の地点までだんびら[*3]振りかざして斬り込んでみせたことにある。

（立花隆『エコロジー的思考のすすめ—思考の技術』中公文庫）

※問題の作成上、文章の一部を省略している。

＊1　地衣類……岩や木の幹などの表面に薄く一面につく植物。
＊2　マルクス……プロイセン王国出身の哲学者、経済学者、革命家。
＊3　だんびら……刀。

問一　本文は A 、 B 、 C の三つの段落に分けられます。それぞれの段落の見出しの組み合わせとしてもっとも適切なものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　A 遷移には革命がつきもの　B 生々流転する自然　C 環境変化に適応するには
イ　A 環境変化に適応するには　B 地球の支配の譲渡　C 予測不可能な環境変化
ウ　A 万物流転こそ自然の実相　B 環境変化への適応　C 繁栄から凋落への移行
エ　A 遷移—生々流転する自然　B 繁栄は凋落の条件　C 遷移には革命がつきもの

問二　傍線部①「遷移」について、

(1)　「遷移」の内容としてもっとも適切なものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　岩石が地衣類に、地衣類がコケ類に変わっていくというように植生が変化すること。
イ　小さな植物が育つ土壌から大きな植物が育つ土壌へと、森林が形成され続けること。
ウ　植物の生長の過程が、自然災害や人間の手によって徐々に変わっていくこと。
エ　その場所に生えている植物の種類や動物の相が少しずつ移り変わっていくこと。

(2)　「遷移」が起きる理由について説明した連続する二つの文を抜き出し、**最初の五字**を答えなさい。

問三　傍線部②「われわれ人類も自己の活動それ自体によって環境を自らの存在にふさわしくないものに変えつつある」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　人類の生み出した地球環境が、いつの間にか人類だけでなく他のあらゆる生物も繁栄できるような環境にもなっていたということ。

**イ**　人類の繁栄が生み出した環境は自らの生存に適さないものとなり、別の生物にとっての繁栄の条件を作り出していると言えるということ。

**ウ**　三〇億年に及ぶ生命の進化史をマクロの視点で見たときに、人類の時代ほどわがもの顔に地球を支配している時代はないということ。

**エ**　私たち人類が変えてしまった自然環境のせいで、これまで長きにわたり生き続けてきた多くの生物が適応できなくなってきているということ。

問四　傍線部③「その新しい種がマルクスの予言を実現してくれるかどうかは、むしろ疑わしい」とありますが、疑わしいのはなぜですか。その理由を説明したものとしてもっとも適切なものを、**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　遷移の次の次の段階において営まれる生活や、それによって起こる環境変化がどのようなものかについては、資料がなく予測不可能であるから。

**イ**　マルクスは、自然環境における遷移現象を人類の社会史の中に見出そうとしており、根本から無理があると言えるから。

**ウ**　封建社会が絶対主義社会に移り、さらに社会主義社会へと遷移するまではマルクスの予測通りであったが、そこには革命の要素がなかったから。

**エ**　マルクスの思想は空想の部分があまりに多く含まれており、魔力があったが、その力は時代の流れとともに失せつつあるから。

問五　本文に書かれている内容として正しいものを、**ア**～**オ**から**すべて**選び、記号で答えなさい。なお、すべて正しくない場合は解答欄に**×**を記入しなさい。

**ア**　森林の成長は、天変地異や人為的な耕作があったとしても、永遠に続いていくものである。

**イ**　市民社会にレーニンが登場し、革命党の理論を掲げて社会主義社会を推し進めた。

**ウ**　農耕とは人間が遷移を妨害し、ある種の植物だけを繁栄させようとする営みである。

**エ**　人類の進化により、三〇億年の地球史において初めて遷移が終わる可能性が出てきた。

**オ**　マルクスは自然の遷移現象を人類の社会史に見い出し、共産主義社会を完遂させた。

**4**

哲学者であるフリードリヒ・ニーチェは「過去が現在に影響を与えるように、未来も現在に影響を与える」ということばを残しています。「未来も現在に影響を与える」とはどういうことだと考えますか。具体例を挙げ、**一四〇字以上、一五〇字以内**で説明しなさい。

注意事項

・解答欄の一マス目から書きなさい。

・句読点や記号も一字とし、一番上のマスに入ってもよいものとします。

・漢字で書けるものは漢字で書くようにすること。

【下書き】

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| 140 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| 150 | | | | | | | | | |

2022—K—①

二〇二二年度　高校入試　第一回

# 国語　解答用紙

東洋大学京北高等学校

| 受験番号 |
|---|
| |

| 氏名 |
|---|
| |

| 合計 |
|---|
| |

## 1

| | |
|---|---|
| 問一 | (1) |
| 問二 | ① |
| | ② |
| | ③ |
| | ④ |
| | ⑤ |
| 問三 | (1) |
| | (2) |
| | (3) |
| 問四 | (1) |
| | (2) |
| 問五 | (1) |
| | (2) |
| 問六 | (1) |
| | (2) |
| 問七 | |

1

## 2

| | |
|---|---|
| 問一 | |
| 問二 | |
| 問三 | |
| 問四 | |
| 問五 | 一〇字 |
| | 二字 |
| 問六 | |

2

## 3

| | |
|---|---|
| 問一 | |
| 問二 | (1) |
| | (2) |
| 問三 | |
| 問四 | |
| 問五 | |

3

## 4

140

150

4

2022—K—①

# 二〇二二年度　高校入試　第一回　国語　解答用紙

東洋大学京北高等学校

| 受験番号 | 氏名 |
|---|---|
| | |

合計

## 1

問一 (1) ウ

問二 ① カ　② コ　③ ウ　④ キ　⑤ ケ

問三 (1) ゆえをいいて

(2) かけいのしずく

(3) おうむいとあわれなり

問四 (1) イ　(2) ア

問五 (1) ウ　(2) イ

問六 (1) ウ　(2) エ

問七 エ

各1

## 2

問一 ア

問二 ウ

問三 ア

問四 ウ

問五 一〇字 ひとりで泊まっている

二字 他人

問六 オ

完答

各5

## 3

問一 エ

問二 (1) エ

(2) しかし、あ

問三 イ

問四 ア

問五 イ・ウ

完答

各5

## 4

140

150

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | |